

大学生のファッションショーにおける 心理的要因の研究（第1報）

— ショーの前後における自己効力感・集団効力感の比較 —

(2014年8月30日受付；2014年11月20日受理)

杉田 秀二郎

文化学園大学

Studies of Psychological Factors on University Students in their Fashion Show Part 1: Comparison Between Before and After the Fashion Show on Self-efficacy and Collective Efficacy

Shujiro SUGITA

Bunka Gakuen University, Tokyo, Japan

Abstract

The aim of this study was to examine the psychological factors on university students in their fashion show. The questionnaire was consisted of “General Self-efficacy Scale: GSES” and “Collective Efficacy Scale”. The questionnaire was administered to 101 university students before and after their fashion show. The hypotheses of this research were that the scores of the General Self-efficacy Scale and Collective Efficacy Scale would reveal the changes before and after the show, they also reveal no differences among students’ courses and some differences on the role or satisfaction of fashion show. As a result, there were significant changes among pre, post and after a month of the show. There were no significant differences among students’ courses or the role of the fashion show, but there were significant differences on individual and overall satisfaction. In conclusion, it was suggested that self-efficacy and collective efficacy had relationship to satisfaction rather than students’ courses or the role of the fashion show.

(Received August 30, 2014; Accepted November 20, 2014)

Key words: *self-efficacy, collective efficacy, individual satisfaction, overall satisfaction, university students, fashion show*

(Journal of the Japan Research Association for Textile End-Uses, Vol.55, pp.906-912, 2014)

要 旨

大学生によるファッションショーにおける心理的要因を調べることを目的として、101名の大学生を対象に調査を実施した。調査はショーの実施前、実施後、および1か月後であり、自己効力感・集団効力感の変化とそれに影響を及ぼす要因を検討した。仮説はショーの前後で自己効力感および集団効力感に変化がみられるのではないかと、また学生の専攻するコースでは差はみられないが、ショーでの役割や満足度では差が生じるのではないかとした。分析の結果、ショーの前後で自己効力感および集団効力感に有意な変化がみられた。またコースおよびショーでの役割では差はみられず、満足度では有意な差が生じた。したがって、効力感に関連するのはコースや役割よりも満足度であることが示唆された。

キーワード：自己効力感，集団効力感，個人満足度，全体満足度，大学生，ファッションショー

1. 目 的

これまでファッションショーの効果として、特に高齢者が自ら出演した際の心理的效果（感情や行動意欲の活性化）が報告されている¹⁾²⁾³⁾。大学生の視点としては箱井⁴⁾の報告があるが、これは大学生が直接ファッションショーに関わったものではない。このように大学生自身によるショーを対象とした研究は見られない。また特に高齢者のファッションショーの場合、スタッフはあくまでもショーを支える裏方で多くは施設等の職員であり、研究対象は出演者（モデル）に限られている。さらに感情や意欲への効果は調べていても、認知的な要因（例えば自己効力感）への効果についての調査は見られていない。

そこで本研究では、大学生によるファッションショーを取り上げ、出演者（モデル）もスタッフも同じ立場（大学生の同学年どうし）でショーに携わる大学生を対象として調査を行うこととした。具体的には、ショーの前後および1か月後で自己効力感および集団効力感を比較し、さらにこれらに関連する要因を検討することとした。

自己効力感とは、Bandura⁵⁾が提唱した社会心理学的な概念であり、ある行動を達成できるかどうかという信念である。また集団効力感（collective efficacy）とは自己効力感を集団に拡張したもので、同じくBanduraが提唱している。これは課題の遂行のために集団で共有された信念であり、個々の構成員の効力に関する信念の合計ではなく、集団レベルでの独立した性質である、とされている⁶⁾。また、集団としての行動やその結果に影響を及ぼす先行要因として存在している⁷⁾。なおcollective efficacyにはいくつかの訳語があるが、本研究では最も一般的であると考えられる呼称を用いることとした⁸⁾。

仮説は、ショーの後で自己効力感および集団効力感が高まり、1か月後はショー前ほどではないが低下するのではないかと、また学生の専攻するコース（後述）によって自己効力感・集団効力感に差は見られないが、ショーでの役割によって差は見られるのではないかと、さらに満足感によって差が生じるのではないかとした。

学生によるファッションショーの特徴であるが、コンセプトを元にイメージし、それをファッション画に表し、そこから実際の服を作成するという過程をたどる。作られるのはショーのための服であり、ふだんの生活で着るものではない。実用的でないとも言えるが、逆に芸術に近いということもできる。

服のイメージから作成まで、授業であるので教員の指導は入るが大学生自身が携わる。またプロの指導も入るが、スタッフも大学生が担当する。したがって、制作、フィッティング（着付け）、ウォーキングを含む総合的なパフォーマンスととらえることもできよう。

2. 方 法

2-1 対象および手続き

2014年6月に服装系学科の学部学生（3年生）によるファッションショーが開かれ、そのショーの1週間前、終了後の1週間以内、および1か月後の計3回質問紙調査を実施した。調査対象は、そのファッションショーに授業として参加する3年生全員（101名）であった。調査はファッションショーに関連する授業で実施し、有効回収数は平均95.3名（有効回収率94.4%）であった。性別の内訳は女子95名（94.1%）、男子6名（5.1%）であった。なお男子は少数であることと、女子と同じように参加していること、さらに女子と同じ

シーンでモデルを務める者もいたため、男女を込みにして分析することとした。大学3年生のため20歳・21歳で85.1%を占めているが、最大値は27歳であり、平均年齢は20.7歳 (SD 1.34) であった。

また調査は任意で無記名であり、回答の有無や内容が授業評価に影響しないことを明示した。

2-2 調査内容

自己効力感 自己効力感として、一般性セルフ・エフィカシー尺度 (General Self-efficacy Scale: GSES)⁹⁾ を用いた。ファッションやファッションショーに関する特異的な自己効力感尺度は存在しないため、一般的なものを用いた。これは「はい・いいえ」の2件法で、行動の積極性 (7項目)、失敗に対する不安 (5項目)、能力の社会的地位づけ (4項目) の3下位尺度からなる16項目の尺度である。ただし本研究では、ファッションショーの前後に聞く質問としての的を射ていない項目 (例として「記憶力がよい」など) は省き、行動の積極性 (4項目)、失敗に対する不安 (4項目)、能力の社会的地位づけ (2項目) の計10項目で実施した。回答はオリジナルのまま「はい」(1)、「いいえ」(0)の2件法で求め、合計した。範囲は0~10となる。なお「失敗に対する不安」について、下位尺度名および質問文はネガティブなものであるが、質問はすべて反転項目であり、得点が高いほど失敗に対する不安が少ないことを表している。

集団効力感 集団効力感については、1因子構造で10項目から成る集団効力感尺度⁸⁾の質問文を一部修正して用いた。これはスポーツチームを対象としたものであるが一つの競技に特化しないで作られたものであり、汎用性があると考えられたためである。ただし競技場面を想定しているため、チームを「集団」、試合を「ショー」などに置き換え、違和感のないように修正した。回答はオリジナルのまま「全く自信がない」(1)から「非常に自信がある」(6)までの6件法で求め、合計した。範囲は10~60となる。

なおファッションショー終了後1週間以内に行われた2回目の調査のみ、「~できる」という効力感そのものではなく、「~できた」というように質問文の表現を変えた。これは、効力感の比較という意味からすれば同じ質問文にするとところであるが、ショーを終えたばかりの学生の感覚としては未来に関して「できる」という見込みよりも今「できた」という成功体験をしたり達成感を味わ

ったりすることがまず必要で、その後に「できる」という見込みあるいは効力感が生じると考えられるからである。そこで、できたという実感を調べるために、あえて表現を変えた。

満足度 自分の役割や仕事について満足しているかという「個人満足度」と、集団全体について満足しているかという「全体満足度」をいずれも1項目ずつ設定し、「満足していない」(1)から「満足」(5)までの5件法で評定させた。

所属・役割 学生の所属するコース (スタイリスト・コーディネートコース、プロデューサー・ジャーナリストコース、映画・舞台衣装デザイナーコース)、およびショーでの役割 (企画、映像、舞台会場、フィッター、アクセサリー、演出、照明、広報、モデル、音響、ヘアメイク) を選択させた。

分析に際しては、SPSS ver.22 (IBM Corp.) を用いた。

なお対照群として、同じ大学の他学科でほぼ同時期に行われたイベントにおいて、GSESのみだが事前と事後の2回調査を行った。これは、大学生が小学生を対象に薬物乱用防止教室を行うものであった。調査の対象学生数は42名で、うち事前と事後の両方に回答した36名を分析対象とした (平均年齢20.8歳, SD 1.71)。

3. 結果および考察

3-1 基礎統計量

自己効力感とその下位尺度、そして集団効力感の平均値 (標準偏差) はTable 1の通りであった。

Table 1 The mean and SD of GSES and collective efficacy scale

| | Pre | Post | After a month |
|-------------------------------------|------------|-------------|---------------|
| Self-efficacy(GSES) | 5.2(2.46) | 6.6 (2.26) | 5.6 (2.28) |
| Aggressiveness in behavior | 2.3(1.20) | 3.1 (1.06) | 2.6 (1.14) |
| Anxiety of failure | 2.1(1.32) | 2.6 (1.23) | 2.1 (1.37) |
| Social positioning of one's ability | 0.8(0.76) | 0.99(0.83) | 0.95(0.96) |
| Collective efficacy | 40.2(7.81) | 45.1 (8.60) | 41.7 (8.98) |
| | mean(SD) | | |

3-2 自己効力感の変化

全体での一般性セルフ・エフィカシー尺度の平均値はショー前が5.2、ショー後が6.6、1か月後が5.6であった (Fig. 1)。この変化を統計的に比較するために、分散分析を行った結果、主効果が有意であった ($F(2, 170) = 25.206, p < .001$)。そこでTukey HSDによる多重比較を行ったところ、ショー前とショー後 ($p < .001$)、ショー後とショー1か月後 ($p < .001$) に有意差が見られた。ショ

一前とショー1か月後の間には、有意差は見られなかった。つまり、ショー後に自己効力感は上がったが、ショー1か月後にはショー前と同じ程度まで下がったということになる。

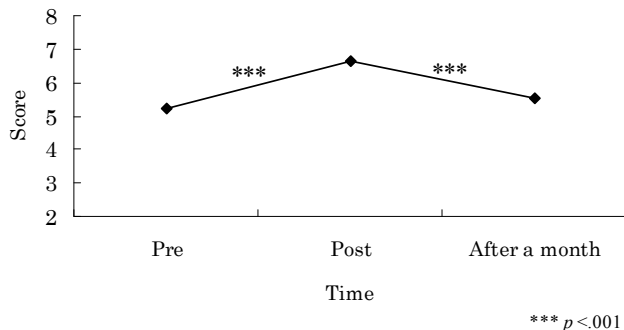


Fig. 1 Change of GSES

下位尺度では、行動の積極性(範囲 0~4)では、ショー前が 2.3, ショー後が 3.1, 1か月後が 2.6 であった (Fig. 2; なお下位尺度によっては項目数が異なるため、下位尺度間の得点の比較はできない箇所がある)。主効果が有意であり ($p<.001$), Tukey HSD による多重比較を行ったところ、ショー前とショー後 ($p<.001$), ショー後とショー1か月後 ($p<.001$), ショー前とショー1か月後 ($p<.05$) とすべてにおいて有意差があった。つまり、自己効力感のうちの行動の積極性に関しては、ショー後に自己効力感は上がり、ショー1か月後には下がったが、ショー前よりは高かったということになる。

同じく失敗に対する不安(範囲 0~4)では、ショー前が 2.1, ショー後が 2.6, 1か月後が 2.1 で

あった (Fig. 2)。主効果が有意であり ($p<.001$), Tukey HSD による多重比較を行ったところ、ショー前とショー後 ($p<.001$), ショー後とショー1か月後 ($p<.001$) に有意差が見られた。つまり、自己効力感のうちの失敗に対する不安に関しては、一般性セルフ・エフィカシー尺度と同様にショー後に不安は低くなったが、ショー1か月後にはショー前と同じ程度になったということになる。

同じく能力の社会的位置づけ(範囲 0~2)では、ショー前が 0.8, ショー後が 0.99, 1か月後が 0.95 であった (Fig. 2)。主効果が有意であり ($p<.001$), Tukey HSD による多重比較を行ったところ、ショー前とショー後 ($p<.05$) にのみ有意差が見られた。つまり自己効力感のうちの能力の社会的位置づけに関しては、ショー後に上がり、ショー1か月後に下がったが、ショー後から大きくは下がらなかったということになる。

3-3 集団効力感の変化

全体での集団効力感尺度(修正版)の変化を比較したところ、ショー前が 40.2, ショー後が 45.1, 1か月後が 41.7 であった (Fig. 3)。分散分析で検討した結果、主効果が有意であった ($F(2, 172) = 21.831, p<.001$)。そこで Tukey HSD による多重比較を行ったところ、ショー前とショー後 ($p<.001$), ショー後とショー1か月後 ($p<.001$) に有意差が見られた。ショー前とショー1か月後の間には、有意差は見られなかった。つまり、ショー後に自己効力感上がったが、ショー1か月後にはショー前と同じ程度まで下がったということになる。

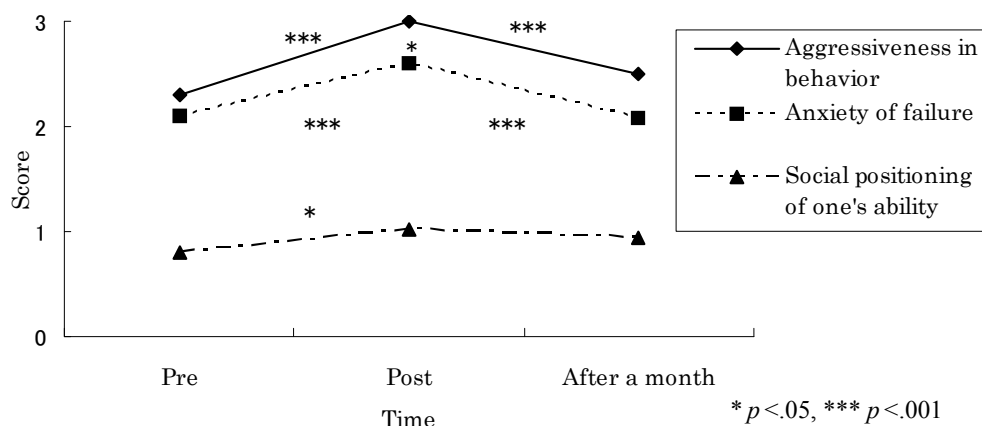


Fig. 2 Change of subscales in GSES

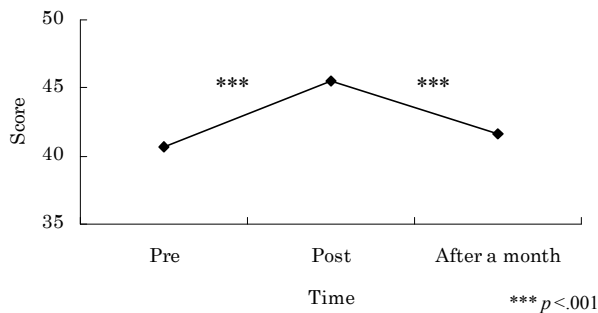


Fig. 3 Change of collective efficacy

3-4 コースによる自己効力感・集団効力感の差異

学生の所属する3コースで自己効力感・集団効力感に差異があるか否かを分散分析で比較したところ、仮説通り有意な差はみられなかった。これは、コースにはそれぞれ特徴があるが、学生は所属するコースに関わらずショーでの役割を希望できるため、結果としてコースの特徴が薄れると考えられたため、その通りとなった。

3-5 ショーでの役割による自己効力感・集団効力感の差異

ショーでの役割によって自己効力感・集団効力感に差異があるか否かを分散分析で比較したが、有意な差はみられなかった。ショーでは、ランウェイをウォーキングするモデル以外のスタッフ（いわゆる裏方）もいる。モデルは観客の反応を直に感じることのできるためその役割の違いが効力

感にも影響を及ぼすと考えられたが、差はみられなかった。その理由の一つとして、含まれる人数が少ない役割があるからと考えられたため、11種類ある役割を性質が似たもの（「企画」と「演出」、「映像」と「照明」と「音響」、「アクセサリー」と「ヘアメイク」）でまとめて、7種類にして再分析したが差はみられなかった。つまり、役割がモデルであれそれ以外のスタッフであれ、効力感の違いはないということになった。

3-6 満足度の高低による自己効力感・集団効力感の差異

個人満足度・全体満足度の高低によって自己効力感・集団効力感に差異があるか否かを検討することとした。そこで、個人満足度・全体満足度の5件法の回答において満足しているほう（4・5）を高群（H）、満足していないほう（1・2）を低群（L）として、自己効力感・集団効力感を比較した（満足度は調査時期によって異なり、違う群になることがあるため、時期ごとに群を設定した）。その結果、次のようになった。

自己効力感に関しては個人満足度の高いH群では高く、低いL群では低くなり、有意な差があった（ショー前 $p<.001$, ショー後 $p<.10$, 1か月後 $p<.001$; Fig. 4）。一方、全体満足度でみるとH群とL群とではショー前とショー後では有意差はなく、1か月後のみL群が有意に低くなった（ $p<.05$; Fig.5）。すなわち、ショー前とショー後

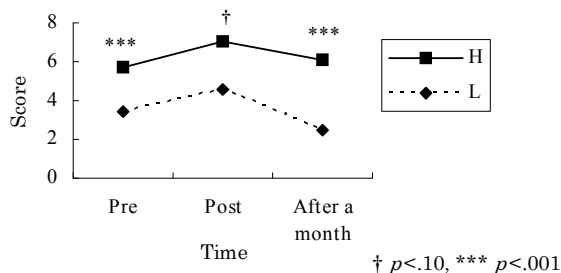


Fig. 4 GSES by H & L group on individual satisfaction

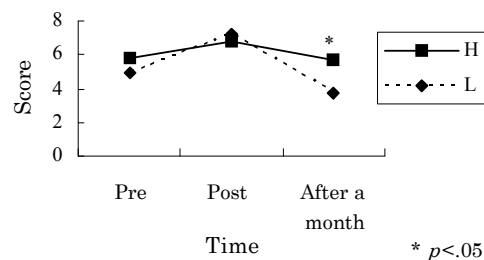


Fig. 5 GSES by H & L group on overall satisfaction

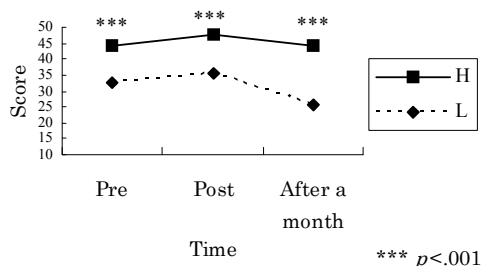


Fig. 6 Collective efficacy by H & L group on individual satisfaction

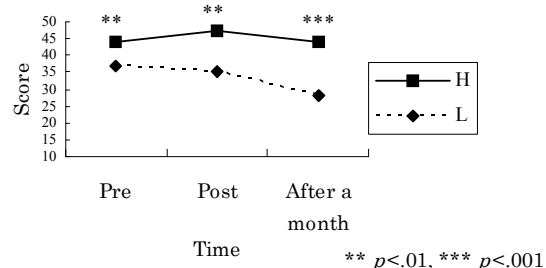


Fig. 7 Collective efficacy by H & L group on overall satisfaction

では、全体満足度が低くても自己効力感には影響しないのではないかと（すなわち個人満足度が高ければ、自己効力感は保たれるのではないかと）考えられた。

集団効力感に関しては個人満足度の高い H 群では高く、低い L 群では低くなり、有意な差があった（ショー前 $p<.001$, ショー後 $p<.001$, 1 か月後 $p<.001$; Fig. 6）。また全体満足度の高い H 群では高く、低い L 群では低くなり、有意な差があった（ショー前 $p<.01$, ショー後 $p<.01$, 1 か月後 $p<.001$; Fig. 7）。特に全体満足度が低い L 群では、時間が経つに連れ、集団効力感に低下傾向がみられた。

これらのことから、自己効力感・集団効力感には個人満足度・全体満足度が関わっていることが示唆された。ただし例外として、ショー前とショー後では、全体満足度は自己効力感には関連しないことも示唆された。これはショー前とショー直後ではまだショー全体の評価が定まっておらず、全体の評価やパフォーマンスに対して自己が果たした役割が意識されていないために全体満足度が自己効力感に影響しなかったためではないかと考えられる。

3-7 自己効力感と集団効力感との関連性

なお自己効力感と集団効力感との関連性について探索的に相関分析を行った結果、ショー前では相関係数が .414 ($p<.01$), ショー後では .523 ($p<.01$), 1 か月後では .405 ($p<.01$) で、3 回通してでは .479 ($p<.01$) と、中程度の相関があった。

3-8 対照群との比較

対照群（GSES のみの事前・事後の 2 回調査）をファッションショー参加者と事前と事後の 2 要因の分散分析で比較すると、事後は事前よりも有意に高かったが、学科どうしでは有意差はなく、また交互作用もなかった。対照群の回答者は全員ではなくより積極的に取り組んだ者と考えられるが、イベントの内容は全く異なっても自己効力感自体に違いはないという結果が得られた。

4. 総合的考察

ショーの後で自己効力感および集団効力感が高まり、1 か月後は低下するのではないかとという点では仮説は支持されたが、ショー後から 1 か月後にかけて有意になるほど低下するのは予想以上であった。

ショー後に自己効力感が高まるのは予想されたが、有意に高まった理由として、まずイベント後

の高揚感が持続していたことが考えられる。一般的にも何か重要なことが終わった後には開放感を感じるものであるが、何か月も前から学年全体で準備してきたものであり、ショーが終わった直後の学生の様子は達成感と開放感、高揚感などが入り交じったものである。次に、2-2 調査内容で触れたようにショー後の質問では実際にできたか否かという聞き方をしたために、将来のことに対する見込みを聞くよりも得点としては高くなった可能性がある。

一方、ショー 1 か月後には有意に低下し、ショー前と有意差がなかったということは、ショー前と同じ程度まで下がったということになる。ある程度低下することは予想されたが、ショー前と同程度ということは、高まった自己効力感は持続していないということになる。

これを下位尺度別に見てみると、行動の積極性ではショー後に自己効力感は上がり、ショー 1 か月後には下がったが、ショー前よりは高くなった。1 か月後に低下はしているが、ショー前よりは積極的になっていると考えられる。失敗に対する不安では、尺度全体のパターンと同じで、ショー 1 か月後はショー前と同じ水準になったと考えられる。能力の社会的位置づけでは、ショー後に上がってからは 1 か月経っても有意には下がっておらず、積極性や不安よりもより認知的な側面が維持されていると考えられる。

集団効力感尺度（修正版）では、ショー後には有意に高くなったが、ショー 1 か月後には有意に低下してしまった。これも一般性セルフ・エフィカシー尺度と同様にショー後には高揚感があったと考えられることと、実際にできたか否かという聞き方をしたために、将来のことに対する見込みを聞くよりも得点としては高くなった可能性が考えられる。

今回の調査では自己効力感・集団効力感ともに持続するという結果は得られなかったが、能力の社会的位置づけという認知的な側面が維持されたのは興味深い点である。

自己効力感・集団効力感に関連があるものとしては、今回の調査ではコースや役割ではなく満足度という結果になった。

役割に関しては、異なった役割（特にモデルとそれ以外のスタッフ）を担いながら、効力感としては差はないという結果になった。ショーの準備においては、自分が着る服は自分で合わせられないために作れず、必然的に他者が着る服を制作す

ることになる。そのため、自分のためというよりはお互いのために協力し合うという姿勢が生じて、役割に関わらず同じような効力感が生じるのかもしれない。

満足度と効力感との関連であるが、バンデュラは自身の社会的学習理論の中で効力の信念の源として、いわゆる成功体験、代理経験、社会的説得、生理的・感情的状態を挙げている^{10) 11)}。このうちの成功体験、社会的説得、生理的・感情的状態は、ショーの成功（1日4回公演で延べ1600名余りが来場。毎年、高評価を得ている）、準備過程での自己強化や他者からの暗示、そして上演中の緊張と終了後の解放として感じていると考えることができる。また代理経験も、例えばモデル以外のスタッフがモデルを見て感じている可能性がないとは言い切れない。そしてこれらが満足度として集約されているのではないかと考えられる。

今後は、調査で効力感と達成感とを分けるとともに、自己効力感と集団効力感を同じ軸で比較できるような形式の尺度を工夫する必要があるかもしれない。また、ショーにおける満足度についても、効力感との関連がみられたことから検討する必要がある。

謝辞

調査に当たって、文化学園大学現代文化学部国際ファッション文化学科・主任教授の古御堂誠子先生には多大なご理解を賜り、同学科3年生の各コースの担任・副担任である柴田早苗先生、梶田貴子先生、矢澤郁美先生、大西果林先生、米田紀子先生、樋掛英里先生には大変なご協力をいただきました。

ここに改めて感謝の意を記させていただきます。

引用文献

- 1) 上野裕子, 箱井英寿, 小林恵子; 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する事例研究—高齢者の情動活性化の試みとしてのファッションショー—, 繊消誌, 42(11): 760-765 (2001)
- 2) 箱井英寿, 上野裕子, 小林恵子; 高齢者の感情・行動意欲の活性化に関する基礎研究(第2報)—高齢者ファッションショーが高齢者の被服意識・行動に及ぼす効果—, 繊消誌, 43(11): 749-757 (2002)
- 3) 安永明智, 野口京子, 谷口幸一; 装い行動が高齢者の QOL に及ぼす影響に関する研究, 服飾文化共同研究最終報告 2010: 136-143 (2011)
- 4) 箱井英寿; ファッションショーが高齢者の被服意識・行動に及ぼす効果—大学生の視点からとらえた効果—, 大阪人間科学大学紀要, 4: 5-10 (2005)
- 5) Bandura, A. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215 (1977)
- 6) Bandura, A. Exercise of human agency through collective efficacy, *Current Directions in Psychological Science*, 9, 75-78 (2000)
- 7) 内田遼介, 土屋裕睦, 菅生貴之, スポーツ集団を対象とした集合的効力感研究の現状と今後の展望: パフォーマンスとの関連性ならびに分析方法に着目して, 体育学研究, 56: 491-506 (2011)
- 8) 河津慶太, 杉山佳生, 中須賀巧; スポーツチームにおける集団効力感とチームパフォーマンスの関係の種目間検討, スポーツ心理学研究, 39(2): 153-167 (2012)
- 9) 坂野雄二, 東條光彦; 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究, 12(1): 73-82 (1986)
- 10) Bandura, A. Exercise of personal and collective efficacy in changing societies. In A. Bandura (Ed.), *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press. pp.1-45 (1995) (バンデュラ 野口京子(訳); 激動社会における個人と集団の効力の発揮, 激動社会の中の自己効力, 本明寛・野口京子(監訳), 春木豊・山本多喜司(訳), 金子書房, 東京 p.1-41 (1997))
- 11) Bandura, A. Personal and collective efficacy in human adaptation and change. In J. G. Adair, D. Belanger, & K. L. Dion (Eds.), *Advances in psychological science: Vol. 1. Personal, social and cultural aspects*. Hove, UK: Psychology Press. pp.51-71 (1998)

Corresponding Author: Shujiro Sugita, Faculty of Liberal Arts and Sciences, Bunka Gakuen University, 3-2-1 Josuiminami-cho, Kodaira-shi, Tokyo 187-0021, Japan, E-mail: sh-sugita@bunka.ac.jp
連絡先: 杉田 秀二郎, 文化学園大学現代文化学部
〒187-0021 東京都小平市上水南町 3-2-1